

# 地域に根ざした エンパワメントの力。 女性を孤立させない 「ミモザハウス」実現の軌跡

認定特定非営利活動法人

女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ

女性や子どもが安心して自分らしく生きられる社会を目指し、

相談支援や緊急一時保護施設（シェルター）運営、

デートDV防止啓発など幅広い取り組みを続けてきた

認定NPO法人「女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ」。

90年代に女性たちの人権擁護を目指す市民団体として発足して以降、

代表理事の正井禮子さんを中心に、草分け的な存在として知られてきた。

阪神・淡路大震災後は、DV被害者の支援をはじめ、

さまざまな女性のライフステージに寄り添う切れ目ない居場所づくりや、

支援を展開している。2024年には、生活に困窮するシングルマザーや留学生などが

孤立せず「ここに住みたい」と考える新しい支援付き住宅「ミモザハウス」を開設。

全国でも注目を集める取り組みだ。地域に根を張り、

誰も取りこぼすまいと当事者を中心に据えたエンパワメントを行う

「唯一無二」の団体が、ミモザハウスを実現させるまでの軌跡をたどった。



兵庫県、「困難を抱える女性のための総合的エンパワメント事業」

<https://wn-kobe.or.jp/>



正井禮子代表理事、鈴木幸恵事務局長  
（2026年2月9日最終発表会参加者）

「ここに住みたい」と考える住まい

広々とした建物内に、楽しい子どもたちの声が響く。おしゃれな北欧家具に、自由に遊べるキッズスペース、人が集まることのできるカフェスペースに、ワークスペースまで。旧女子寮を改修した4階建てに全40室を備えたミモザハウスは、2024年6月にオープンした。さまざまな世代の女性たちが一緒に暮らせる住まいを作ろうと、正井さんを中心に構想を練ること約10年、民間企業や共同運営団体、行政との連携でようやく実現にこぎつけた。

母子や学生、单身女性などに安価に部屋を貸し出すミモザハウスの特長は、支援経験のある常駐スタッフによる見守りや、定期的なカウンセリング、就労・学



子どもたちがのびのび遊べるキッズスペースの一角



家具・家電付きのミモザハウスの部屋の一例

習支援や食糧支援など、きめ細かなサポートが受けられること。ウィメンズネット・こうべが長年培ったシェルター運営や母子支援のノウハウを生かした、まさに「集大成」の住宅だ。困難を抱える女性のための住宅は類例が少なく、国内外の人々が視察に訪れるという。

そんなミモザハウスのキーワードは、自らが「ここに住みたい」と考えることだと、正井さんは強調する。きっかけは2010年、デンマークで自身が視察したシェルターだった。築年数の経った建物ながらも、室内は北欧家具で温かく整えられ、子ども用の家具が並ぶリビングもあった。正井さん自身、「ここに住みたい」と考えるすてきな空間だったと、当時を語る。

特にDVに遭っている女性たちは、「住まいの確保ができない」ことを理由

に、家を出られない現実がある。また、家を出られたとしても、職に就いていないなどの問題から「ここにしか住めない」と、住まいを自由に選ぶことが難しいケースも多い。この状況に問題意識を持つことになった原点は、ウィメンズネット・こうべの発足当時にさかのぼる。

## 女性に対する暴力からの解放を目指して

1992年、まだ「DV」という言葉が社会に浸透していなかった時代に、正井さんを筆頭に市民有志が始まったウィメンズネット・こうべ。ここでは女性たちが自由になれる社会を目指し、連帯の場や、勉強会を重ねてきた。

活動を始めて間もない1995年、阪神・淡路大震災が発生した。震災の渦中で浮き彫りになったのは、ジェンダーに基づく暴力や貧困、女性たちの生きづらさだった。

例えば避難所での性暴力、逃げることでできない環境下でのDVや虐待などの暴力被害、経済的に余裕のない女性たちが住んでいた「古い木造住宅」の全壊―。その様子は、同団体の著書にも記録されている。

「地震の揺れは平等にきたとしても、結果は平等ではなかった。古い家や木造文化住宅が壊れ、女性のお年寄りが最も多く亡くなられた。（中略）女の給料でコンクリートの家は建たない。いったん結



ミモザハウスを開設したウィメンズネット・こうべ代表理事の正井禮子さん

地域に根を張る「コミュニティ

正井さんの印象に残っている母子がい

婚・育児で退職すれば、再就職はパート勤務がほとんど。離婚しても子どもがいなければ市営住宅にも入れない（※1）  
こうして、ウィメンズネット・こうべの活動は「女性に対する暴力からの解放」へと展開していった。2004年には、女性と子どものためのシェルター「ともだちの家」の運営を開始。今は、DV被害を受けた女性の相談、一時保護から居住支援まで、総合して行っている。そのほかにも、学校現場で若年世代に向けたデートDV防止講座、学習支援など、あらゆる女性や子どもとともに、支援のあり方を模索してきた。



最終発表会団体報告の様子



「ともだちの家」で過ごした女性たちが思いを綴ったノート

る。夫のDVから逃れ、シェルターを利用した母親と5人の子どもだ。退所後、地域で暮らす母子に食料支援を届けに行った正井さんは、ある日こんな話を聞いた。

「近所付き合いができていなかったけれど、一年くらい経って信頼を寄せた隣人の女性に、勇気を出して『夫の暴力から逃げてきた』と打ち明けました。そして、『暴力なんてよくあることよ、私なら子どものために我慢するわ』と心無い言葉をかけられて…」

正井さんは言う。「DVを理由に離婚した女性たちは『離婚してよかった』と思う一方で、『子どもから父親を奪った』『貧困にしてしまった』という罪悪感を持っています。だからこそ、そういう言葉に深く傷ついてしまう。お母さ

オープンな場所にあるものの、室内の様子が目立ちすぎない、「半分開く、半分閉じる」つくりで、どこかほっとする空間だ。

WACCAは週4日開所し、子どもの学習支援や、気軽に参加できるイベントを実施している。県外から引越してきた孤立しがちな母子世帯や、悩みを抱える母親や子どもから、相談を受けることもあるという。経済的に困窮しているなど、特に気になる家庭には食料品の無償配布を案内しつつ、対面で困りごとを聞く機会をつくり、継続したかわりを持つように心掛けている。

今は、単身・高齢女性が参加しやすい定期イベント「COCOサロン」なども開催し、女性たちのライフステージが変わっても通える工夫を続けている。WACCA立ち上げ時から携わっているスタッフの茂木美知子さんは、「自分がいいなと思う場所に、つながり続けられることが大切だと思うんです」と実感する。「私たちは常に、目の前にいる困っている人のためには何が必要か？という視点で、みんなと一緒に居場所づくりをしてきました。地域に根を張っている唯一無二の場所だから、『明日はもうありません』とは言えない。関わってくれた人たちの変化と一緒に喜ぶためにも、継続しなければならいと思います」

WACCAスタッフの園田美恵子さん



商店街の中にある「WACCA」は、木のぬくもりある入り口が特徴

んが閉じこもってしまうと、子どもも同じように閉じこもってしまう。そんな姿を見て、何とかしないとと思ったんです」

「貧困＋孤立＋子育て」という困難な状況が続くことは、虐待のハイリスク要因になり得ると、正井さんは続ける。「孤立していると将来のことを考えるのが怖く、『今だけをどうにかしよう』と考えてしまうんです。そんな悩みを、一人で抱えているお母さんたちも多いです」

そこで2013年、「しんどいことを話しに来られる場所」として、神戸市長田区の商店街に、シングルマザーをはじめとする女性と子どもの居場所「WACCA (women and children care center わかか)」を開いた。



WACCAのスタッフ、ボランティアなどが協力して作った温かな空間

は、ウィメンズネット・こうべのさまざまな活動に20年以上携わっている。「関わりを持つているシングルマザーの方から、『仕事を見つけた』などの報告をもらえることがうれしい」と話す。スタッフ同士でもしんどさを共有し支え合えることが、この活動を続ける大きな力になっているという。

### 子どもたちが帰ってこられる居場所

WACCAでは、小中学生の学習支援にも力を入れている。経済的に余裕がない母子世帯でも、「塾に通いたい」という子どもたちのために、大学生やシニアなどの多様なボランティアが集まり、週3回、子どもたちにマンツーマンで勉強を教えている。2024年度は、小中学生延べ2000人、ボラン

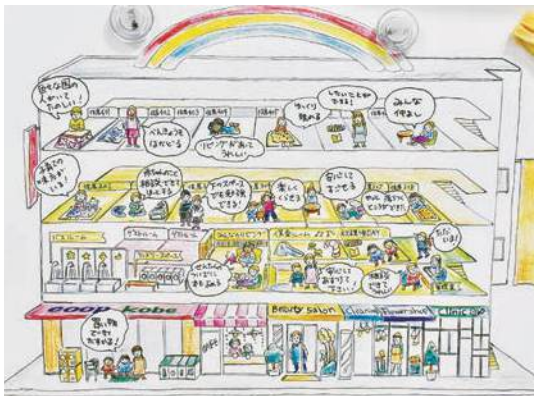
ティアは同1000人が関わってきた。WACCA塾を担当している小畠麻理さんは、「成長していく子どもたちを見守りたくて、スタッフを続けています」と笑みを見せる。「WACCA塾では、子どもたちのやりたい！に答えられるよう、勉強の強制はしていません。自分で選んだんだ、という実感を持って欲しいからです。子どもたちが自分のペースで顔を出し、心を落ち着けられるように、WACCAの室内には「隠れることができる空間」などいくつもの居場所がある。

WACCAに顔を出した子どもたちにも、絶え間なく「〇ちゃん、こんにちわは」、「今日はどうしたの」と声をかけて回る小畠さんは言う。「お母さんとケンカしたとか、学校で嫌なことがあったとか、WACCAに来るなり話し出す子どもたちもいます。心の揺らぎや傷つきも多い時期だからこそ、話したいと思った時に話を聞いてあげられる空間でありたいと思っています。受験勉強を頑張って巣立った卒業生たちが、顔を出してくれることもあります」

### 孤立させない住まいのかたち

「WACCAにいるときは皆さん安心して元気になるんです。でもアパートに戻ると孤独で希死念慮が増す、と打ち明ける人もいました」と正井さんは語る。

同団体が2019年にまとめた「DV



正井さんが思い描く支援付き住宅を、娘さんがイラストにした

被害を経験したシングルマザーと子どもに関する実態聴き取り調査報告」では、離婚後の母子の声が寄せられた。「1歳半の子どもと二人きりになり、不安で眠れなくなった。頭痛や吐き気で精神科に通った」、「将来への不安が大きい。子どもをどう育てていくか、いつまで働けるか、常に不安がある」といった切実な叫びだ。

特に深刻なのが「離婚後の住宅確保の難しさ」だと、正井さんは言う。「保証人がいないと家を借りられない」「収入がない」「子どもが複数人いる」。こうした条件が重なり、住まいが見つからず、孤立する母子が後を絶たない。一時的に避難してきたシェルターや母子生活支援施設を出た後の行き場がなく、再び困難に直面する。その現実を

さまざまな世代の女性と子どもが困りごとを相談し、コミュニティに参加し、安心して暮らしていくことができるセーフティネットの構築につながった。そんなミモザハウスを参考にしようと、北海道から沖縄、さらに海外からも視察が相次ぎ、各地で「同じような施設をつくりたい」という声も寄せられている。正井さんは「その声をもらうだけでも、本当につくってよかったと思います」と手応えを感じている。

そして、「民間の取り組みとして始めたものを、国の政策として広げていきたい。DV被害を経験した人にも、普通に暮らす権利、援助を受ける権利がある。その尊厳を守れる社会にしたい」と訴える。

活動を存続させる上で、経済基盤の



全国各地のつながりの大切さを実感する正井さん

前に、正井さんは「安心して暮らせる住まいを作らなければ」と再確認した。

デンマークのシェルター視察後から、神戸市内でも空き家や休眠施設の提供を呼びかけるチラシを配り歩いていたが、思うような反応はなかった。諦めずに続けること約10年、ワイメンズネット・こうべの思いに共感した生活協同組合から、耐震化済みの旧女子寮を無償提供するという話が舞い込んだ。ようやく、視界が開けた。国土交通省の補助事業にも採択され、神戸市内の公益財団法人との共同で、念願の「ミモザハウス」が誕生した。

ミモザハウスには、2025年7月末時点で、母子世帯、学生、単身者など26世帯が暮らす。「いつてらっしゃい」「お帰りなさい」と声をかけ合う日



オープンに当たり、全国各地の関係者や支援者から寄せられたコメント

確立や次世代への継承といった課題は多い。YUIみらいプロジェクトの「ソーシャルインパクト助成」への採択を機に、組織体制の見直しを進めている。

また、同じ志を持った全国の団体とのネットワークが広がっていることも実感しているという。「女性の政治参加など、各団体の取り組みや想いに触れると元気をもらえます。助成にとどまらず、ネットワークづくりを後押ししてもらえたことがありがたい」。神戸を拠点に全国の女性支援団体や当事者と密に連携してきた蓄積があるからこそ、「二人では変えられないことも、ネットワークを通じて社会を変えていける可能性がある」と確信している。

## 次世代に託していく

ワイメンズネット・こうべが活動を始めてから33年。多くの困難に寄り添い、女性と子どもたちの居場所を築いてきた一方で、正井さんは率直に語る。

「変わったようでも変わらない日本の歩みの遅さに、絶望してしまうんです。あなたはどうか。これまでは変えられなかったことも、若い人が関心を持って取り組んでいる限り、次世代が何とかやってくれるだろうと希望を持ちたい」

ワイメンズネット・こうべには、若い世代のスタッフやボランティアも加わり始めている。2023年にWACCAに参加したスタッフの一人は、民間企業から

常で、「スタッフが常駐しているからセキュリティ面も安心」との声も上がっている。

ここに越してきたあるシングルマザーは、子どもを抱え将来に漠然とした不安を抱いていた中で、ミモザハウスに来て、「初めて先のことを考えられるようになった」と打ち明けた。「ようやく普通の生活ができる」、「子どもとどこへでも行ける」といった安堵の言葉も聞こえてくる。

また、ミモザハウスができたことで、制度のはざまにいた「中年の単身女性」への支援の薄さも浮き彫りになったという。その他にも、成人したばかりの若年女性や、精神的に大きな負担を抱える人など、共同住宅という形での「安心できる居場所」が必要とされていることを実感している。

一方で、受け入れの難しさもある。住まいを求めて訪れる人の中には「ここに住みたい」と希望する人もいるものの、安全面の確保や生活環境の観点から、受け入れが難しい場合もあるという。その様子を丁寧にヒアリングして、十分な支援ができないもどかしさを感じつつも、「せめて話を聞くことによって、少しでも安心につながれば」とミモザハウスのスタッフは語る。

## 広がるつながりが社会を動かす

ミモザハウスの誕生によって、さま

転身した。

「SNSが発達した今の時代は、リアルに話せる場が限られています。だからこそ、話したくても話せないことがある」とそのスタッフは感じている。大切にしているのは、相談を切り出してくれた人に真摯に向き合うことだ。「困っている人は、普段は見えていないだけで『ふつう』に暮らしています。誰かに相談したり、お互いに頼り合ったりすることが日常の中で自然にできる社会になればいいと思います」。地域に住む乳幼児から高齢者まで、誰もがつながれる関係を築くこと。それが彼女のライフワークとなっている。

2024年から活動に加わった若手スタッフは、社会に根強く残るジェンダー規範に目を向けている。「女性だから『善き母』『善き人』でいなければならぬ、そんな固定観念の中で苦しむ人がいます」。同じ女性であっても、トランスジェンダーであったり、障害があったり、それぞれの事情を抱えている。「関わる人たちが、望む形で自由になれるように、これからは私なりのやり方でエンパワーしていきたいと思っています」

ただ「支援者」として手を差し伸べるのではなく、地域の中で「ともに歩む人」として支え合う。私も、あなたも。ワイメンズネット・こうべが長年かけて培ってきた力は、これからは形を変えながら受け継がれ、多くの人をエンパワーし続けていく。